



北海道中央霊園で人気のテラス墓地。お墓じまいに伴う利用もある。左は理事長の武田さん(写真は一部加工しています)

少子高齢化などを背景に、お墓を撤去する「お墓じまい」や、お寺と檀家(だんか)の縁を切る「離壇」などで、遺骨を合同墓など別のお墓に移す例が目立ってきた。22日の「遺骨の自宅保管」の問題に続き北海道中央霊園(三笠市)の利用者の例を中心に、最新事情を紹介する。

同霊園では、多数の人の遺骨を一緒に埋葬する永代供養付きの合祀(ごうし)墓「結(ゆい)の苑(その)」のほか、去年は2平方メートルのコンパクトなお墓を集合させた「テラス墓地」72基分を造成した。土地使用と墓石のセットで永代使用なら48万～68万円という値段設定。ほぼ完売する人気ぶりで、新規区画を造成中だ。

小樽市の男性(69)は、このテラス墓地を求めて自分と妻の実家の両家の名前を墓石に刻み両家のお墓にしている。男性は一人っ子。自分の両親、父方の祖父母が眠る空知地方でお墓じまい。

札幌市にある妻の実家のお墓から、妻の両親の遺骨を引き上げた。「私の家のお墓が古くなりましたし、私の父、妻の父はともに空知に縁があった人。ゆかりの地に両家の名前を残したかった」と思いを語る。

空知地方に住む女性(56)は横浜市出身で一人っ子。両親と父方の祖母が眠る同市内のお寺で昨年お墓じまいをして、テラス墓地を求めた。「父の五十回忌、母の十三回忌を終えたのが一つのきっかけ。横浜まではなかなかお参りにも行けませんし、お寺には毎年、管理料もお支払いしていました」と語る。管理料を考えると、テラス墓地が価格的に手ごろだったといい、車で30分ほどでお参りに行けることに安心した表情だ。

一方、道央に住む女性(85)は2年前に夫と夫の両親の遺骨を北海道中央霊園の合祀墓「結の苑」に埋葬した。永代供養付きで費用は遺骨1体で3万9千円。夫は20年前に死去し、遺骨はいったん夫の両親の遺骨を預けているお寺の納骨堂へ。夫の死去で年金も減り生活費を切り詰めながら、お寺にお布施や管理料を支払っていた。

その後、お寺側から本堂の改修工事に伴う200万円以上の寄付金の要請が舞い込んだが、とても支払えない。このため、自分が支払える額の寄付をして「離壇」を決意。遺骨3体を自宅に引き取って困っていたが、北海道中央霊園の合祀墓を知って納骨を決めた。

関東地方の男性(76)は、ある日突然、父方の祖父母の遺骨が納骨堂にあるお寺から過去30年分の管理料、命日・お盆の読経代60万円の請求を受けた。父親が死去しているため経緯ははっきりしないが、今後永代供養を頼めば150万円と言われた。請求と合わせて200万円を超えてしまう。

支払いができず遺骨を自宅に引き取り、祖父母が北海道生まれだったため、北海道中央霊園の合祀墓に今年4月に納骨した。

同霊園は、園内のお墓は将来お墓じまいができるよう「期限付き利用」が選べるほか、改葬(お墓の引っ越し)手続きの無料代行、ゆうパックで遺骨を霊園に届けるための全国無料送骨サービスも取り入れている。

理事長の武田寛(ゆたか)さん(55)は、お墓じまいやお寺からの離壇などに関して「信仰心が薄くなった、遺骨や故人のことをないがしろにしているといった世間で言われることとはまったく違う問題。少子高齢化という社会の環境変化や高齢者の間での経済格差が埋葬にまで影響しているのだと思います」と話している。